

海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記

塚原 康子・平 高典子

はじめに

明治32年（1899）から35年（1902）にかけて、海軍軍楽隊から初めてベルリンに留学した吉本光蔵（1863-1907）は、留学中の日記（以下、留学日記）二冊を残している。吉本がベルリンに滞在した1899年から1902年は、ドイツのいわゆる「世紀転換期」にあたり、留学日記は当時のベルリンのリアルタイムの記録であるとともに、明治期にヨーロッパに留学した日本人の生活記録としても興味深い。本稿は、この留学日記の全容を紹介するとともに、記述から窺える当時の日欧間の音楽交流について考察するものである¹。

本稿では、まず吉本の留学日記を含む遺品についての情報と経歴についてまとめ（稿末の略年譜と留学日記主要記事一覧を参照）、その上でベルリン留学中の交友関係、音楽体験、楽器や日本音楽にかかわる事項を中心に報告する。なお、吉本の名は、日本側資料では「Mitsuzo」（みつぞう）、ドイツ側資料は「Kozo」（こうぞう）と綴ったものが多いが、いずれが正しいのかは御遺族にも判断がつかないという²。以下、日本の事跡は年号で、ヨーロッパの事跡は西暦で言及する。

1. 吉本光蔵の遺品および留学日記について

吉本光蔵の遺品は、現在、令孫にあたる玉川佳代子氏（三男で玉川家の養子となった益三氏の長女）が所蔵されている。塚原は、平成16年（2004）に谷村政次郎氏（元海上自衛隊東京音楽隊長）を介して、初めて拝見する機会を得た。主な遺品として、留学中の日記二冊（1900～1901年、1902年）、帰国後の日記三冊（1904年、1905年、1906年）³、手帳一冊（1904～1905年）、留学中の出納簿二冊（1899～1901年、1901～1902年）、携帯履歴、辞令類があり、ほかに留学時代のものと思われる書籍（Benedict Widmann, *Handbüchlein der Harmonie-, Melodie- und Formenlehre*, Leipzig: Verlag von C. Merseburger, 1880）や肖像画（油彩）も残されている。留学日記のうち、1900年～1901年分は、縦20センチメートル、横13.4センチメートルの、表紙が革張りで罫線のないノート一冊に縦書きで記されている（1900年1月28日～3月31日は空白）。1902年分は、ドイツ製の1902年版の軍楽手帳（*Militärmusiker-*

notiztaschenbuch) 一冊に書き込まれているが、記載を欠く日も多い。

これらの遺品は、いずれも明治期の軍楽隊員の留学実態を知る上で類例のない貴重な資料であることから、玉川氏の御承諾を得て、マイクロフィルムないし写真で複製を作成し、東京芸術大学附属図書館に寄贈していただいた。

なお、玉川氏所蔵の遺品とは別に、吉本の撮影した日露戦争従軍中の写真帖一冊、ドイツ語の日記(1902年1月1日～6月10日)一冊、俗曲を収めた手書きの五線譜等の吉本の遺品が、菊池武篤氏より2011年7月に本学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室に寄贈された⁴。これらは、玉川氏所蔵の遺品を補完する重要な資料と考えられるが、今回は精査するに至らず、本稿にその内容を反映させることができなかった。今後の課題としたい。

2. 吉本光蔵の経歴

携帯履歴によると、吉本光蔵は文久3年(1863)10月6日江戸に生まれた。「出生之地」欄には「武蔵国麴町区有楽町」とあり、明治11年の「島根県士族」という公文書の記載を考え合わせると、同地にあった鳥取池田藩の上屋敷内で誕生したものと思われる⁵。明治11年(1878)6月20日、数え15歳で海軍軍楽隊の第1回軍楽通学生10名の一人に採用され、12月28日楽生として正式入隊した⁶。

軍楽通学生制度は、海軍軍楽隊が明治4年(1871)の発足から7年後に始めた後継者養成制度で、初めて一般から志願者を募り、6ヶ月の教育期間後に試験を課して適性を判断し、正式に楽生に採用するという合理的な方式であった⁷。しかも、翌明治12年3月には、ドイツから満26歳の雇教師フランツ・エッケルト(Franz Eckert, 1852-1916)が着任し、発足時から明治10年(1877)までフェントン(John William Fenton, 1831-1890)からイギリス式軍楽の指導を受けた海軍軍楽隊は、これ以後ドイツ式に転換する。つまり、吉本ら第1回軍楽通学生は、それ以前の入隊者と異なり、ほぼ最初からエッケルトがドイツ式で手塩にかけて育て上げた人々であったことになる。

瀬戸口藤吉(1868-1941)の後年の回想によると、中でも吉本は、「資性温和、其の時代の軍楽隊等には珍しい頭脳の能い進取の気力豊富な勉強家であったから、当時雇教師であったフランツ、エッケルトから非常に嘱望され、早くから特別の教育を受けその時分既に和声学等まで教え込まれて居ったので、我々が明治十五年海軍に這入った時は教官として指導を受けたものである。非常に真面目な研究心の強い而して楽譜等書く事が堪能な人であったから早くから編曲や作曲等にも通じて居った」逸材だったという⁸。吉本はベルリンでも到着直後からピアノのレッスンを受けており、公文書では確認できないが、明治12年5月海軍軍楽隊が10名を選抜して開始したピアノ伝習にも加わっていた可能性が高い。専門楽器のクラリネットのみならず、ピアノや和声、作曲・編曲など、軍楽隊の指導者に必要な技能の手ほど

きも、早い段階から受けていたものと推測される。

吉本はその後、明治13年7月3日海軍楽手、18年12月25日海軍楽師（22年6月6日海軍一等軍楽手）と順調に昇任し、21年10月25日軍楽教授（23年7月10日教員）を命じられ、明治27年（1894）7月13日には准士官相当の海軍軍楽師に任じられた。明治28年には、第4回内国勧業博覧会の審査員（楽器部門）を務めている。明治30～31年（1897-8）エッケルトを顧問に行われた『海軍軍楽学理的教科書』の編纂では、楽長の中村祐庸（1852-1925）、後輩の瀬戸口藤吉とともに編纂委員を務めており、楽長に次ぐ立場にあったとみてよい。

その吉本にドイツ留学の命が下ったのは、明治32年（1899）5月13日である。学資として年額二千円が給付された⁹。エッケルトとその後任のグスタフ・アルペ（Gustav Arpe, 1889-1892滞日）の指導によりドイツ式軍楽が定着していたため、海軍軍楽隊が留学生をドイツに送り出すのは当然としても、なぜこの時期に初の留学生派遣が企てられ、吉本が選ばれたのかを明確に伝える資料はない。しかし、明治32年（1899）3月のエッケルト満期解雇後は、海軍軍楽隊が外国人教師を一切雇わないことを考えると、それに代わるべき将来の日本人楽長にはドイツ本国での軍楽研究が必要という判断がまずあり、年齢・経験・能力から見て、吉本がその任務に最適任だったのだろう。当時、吉本は数えて37歳、中村祐庸は48歳で4年後に予備役に入り、瀬戸口藤吉は31歳であった。明治32年6月8日付の軍務局長・諸岡頼之からの通達¹⁰には、ドイツ留学中に従事すべき研究及調査として、「一 我国軍楽ニ適応スヘキ実際の音楽及学理的音楽ノ研究」と「二 軍楽隊ノ組織教育等ニ関スル事項ノ調査」の二項が挙げられていた。まさしく、軍楽隊に必要な音楽実技・理論・組織教育に関わるすべての調査研究が要請されていたのである。

吉本は、1899年8月20日ベルリンに到着、1年余りの準備期間をへて、1900年10月1日に入試を受けて合格し、ベルリン音楽院（Königliche akademische Hochschule für Musik zu Berlin）に入学、1902年3月まで在籍した。1902年3月18日に電報で帰国命令を受け、4月18日ベルリンを発ち、アントワープ、ロンドンを経て、6月11日に神戸、13日に横浜に帰着している。結果的に、吉本のドイツ滞在は二年半余、ベルリン音楽院在籍は一年半弱であった。

帰国後、明治35年10月6日士官（少尉）相当の海軍軍楽長に任じられ、横須賀海兵団付となり、明治36年10月15日の中村祐庸退役後、その後任として海軍軍楽隊全体のトップに上った。この間、日露戦争中は第二艦隊旗艦・出雲に乗り組み従軍した（明治36年12月28日～明治38年3月15日）。明治38年8月に陸・海軍軍楽隊による日比谷奏楽が始まると、横須賀から海軍軍楽隊を率いて初回の8月12日から明治40年6月11日に逝去する直前まで、すべての演奏会の指揮を務めた。享年は45歳、帰国からわずかに5年後のことであった。昭和6年（1931）6月13日には、日比谷公園音楽堂において海軍軍楽隊東京派遣隊（内藤清五指揮）による二十五年忌追悼演奏会が行われ、その前後には音楽雑誌に追悼記事や関係記事が掲載された¹¹。

3. ベルリン留学中の交友関係

留学日記には、当時ベルリンに百人以上いたという日本人¹²や、ドイツ人が数多く登場する。ベルリン市内や欧州各地の知人・友人、日本の家族・親族、友人・知人との手紙や葉書のやりとりも頻繁で、非常に几帳面に記している。ここでは、①軍関係者、②音楽関係者、③エッケルト一家、④その他、の順に吉本の主要な交友関係者を紹介する。

(1) 軍関係者

留学日記に最も頻繁に登場するのが、ベルリン滞在中の海軍軍人たちである。当時の公使館附海軍武官・林三子雄中佐（1898.12.19～1904.1.26駐ドイツ海軍武官）をはじめ、多くの人々と密に交際していた。とくに主計科の二人の士官（大主計窪田重弼、不二樹幾之助）とはごく親しく、毎日のように食事や運動を共にし、手紙をやりとりした。1900年には、日本海軍がシュテティーン（Stettin、現ポーランド領）の造船所に発注していた軍艦・八雲の回航員が、多数ドイツに滞在していた。4月下旬にベルリン観光に訪れた彼らを、吉本らは手分けして「皇居」（Schloß）「遊就館」（Zeughaus）「水族館」（Aquarium）などの市内名所に案内し、吉本自身も八雲の出航直前の6月16日にシュテティーンを訪れ、最新艦を見学し、艦内に一泊している。八雲は1900年6月22日出港し、帰国の途に就いた。

また、当時ベルリン在住の軍人たちは陸海軍の別をこえて「軍人会」を組織しており、留学日記にもその会合がしばしば登場する。また、後述するパリ万博をはじめとする視察旅行でも、ヨーロッパ各地に駐在・留学していた軍人のネットワークを相互によく活用していた。

(2) 音楽関係者（音楽取調掛—東京音楽学校出身者）

留学日記からは、音楽取調掛—東京音楽学校出身の以下の三人が、ベルリンで吉本と特に緊密に行き来していたことが確認できる。

比留間賢八（1867-1936）¹³は、1899年農商務省から派遣されてドイツに渡り、一時八雲関係の通訳を務め、吉本と交流があった¹⁴。

幸田幸（1878-1963）¹⁵は東京音楽学校からの二人目の文部省留学生として1899年留学、ウィーンを経てベルリン音楽院には吉本より一足先に1900年4月から在籍していた¹⁶。9月には吉本の入学試験準備に、「合奏」（ピアノ伴奏か）などをして協力した¹⁷。

瀧廉太郎（1879-1903）¹⁸が1901年5月にベルリンに到着すると、翌日吉本がホテルベルビューに瀧を訪問し、半月ほどの間に展覧会やオペラ¹⁹に共に出かけ、6月ライブツィヒへの出発の際にはアンハルター駅まで見送りに行っている²⁰。ベルリン滞在中、瀧は吉本の住所を自分の下宿先住所として日本に送っている²¹。瀧は年末には発病するが、吉本はその知らせを幸田幸からもらった²²。

(3) エッケルト一家

日本に約20年滞在して海軍軍楽隊を指導したフランツ・エッケルトは、吉本が留学する直前の1899年4月に日本を発ち帰国していた²³。留学日記により、エッケルト一家が、親族のヴェンツェル・エッケルト (Wenzel Eckert) ²⁴を頼ってベルリン近郊に居住していたこと²⁵、またベルリン市中に住む長男フランツ²⁶と吉本とは頻繁に行き来し、誕生日に贈り物をする²⁷など親しい交流を続けていたことがわかった。エッケルトが李王朝軍楽隊教師として招聘され、朝鮮に出立した時期もこれまで不明だったが、1900年12月12日11時に、ベルリンのフリードリヒ街停車場から出発するエッケルトを、吉本が見送っていたことも判明した。日記が書かれる以前、1899年に吉本がベルリンに到着した直後の住所は『東亜』ではヴェンツェル・エッケルト宅となっていて、当然、エッケルト一家の支援があったと推測される。

(4) その他

在留邦人の中で吉本に深く関わったのは、玉井喜作 (1866-1906) ²⁸であった。彼は1894年ベルリンに渡り、1898年月刊誌『東亜：貿易、産業、政治、科学、芸術などのための月刊雑誌 (, *Ost-Asien: Monatsschrift für Handel, Industrie, Politik, Wissenschaft, Kunst, etc.*)』を刊行、ジャーナリストとして活動する一方、在留邦人の面倒を非常によくみて人的交流の中心人物となり、民間外交官の役割を果たしていた。吉本とも頻繁に行き来し、多くの人とネットワーク作りに協力したと思われる。たとえば、アレクサンダー・フォン・シーボルト (Alexander von Siebold, 1846-1911) ²⁹や、後に述べる奥宮健之や川上音二郎夫妻との間を仲介したのは玉井であったと推測される。

吉本がすごしたベルリン生活を、いっそう具体的に活写しているのが、巖谷小波 (季雄、1870-1933) である。小波は1900年11月ベルリンに着き、ベルリン大学付属東洋語学校の日本語教師を2年間勤めた³⁰。彼の『洋行土産』(上・下巻)と吉本の留学日記は、互いが相手の記述を裏付け補いあう関係にある³¹。

吉本にドイツ語を教えたのが、日記の最初から「語学教師」あるいは「プ氏」として、多いときには週4回登場するヘルマン・プラウト (Hermann Plaut, 1846-1909) である。彼は前述の東洋語学校で日本語を教えており、昔話を用いた日本語教科書³²など多くの出版物もある。日記や出納簿の記述を総合すると、ドイツ語のレッスンは一回30分ほどだったと考えられ、一回につき2マルクを支払っている。

公使館関係者との交流も多い。公使館は現地のさまざまな情報の中心であり、在留邦人を招待しての新年会・忘年会・天長節祝宴などが行われた。留学日記には、1900年大晦日の忘年会と1901年天長節において、参加者全員が御真影を拝し、《君が代》を歌い (大晦日は幸田幸が伴奏し、天長節では、小波によると「吉本軍楽長の吹奏のもとで」、万歳三唱したことが見える³³。時折、公使館から音楽会の切符が回されて来ることもあった³⁴。

吉本は実に多くの日本人、ドイツ人と交流しているが、日本ですでに少年のころからエッケルトに仕込まれ、現地でのプラウトのレッスンで磨きがかかった堪能なドイツ語が、大いに重宝され役に立ったに違いない。

4. ベルリンの音楽体験

ここでは、吉本がベルリンで経験したさまざまな音楽体験に、より踏み込んでいきたい。

(1) 入学以前とベルリン音楽院での音楽教育

吉本は、ベルリン到着後ピアノとクラリネットの個人教授³⁵を受けて、1900年10月の音楽院受験にそなえた。合格後は、クラリネットを主専攻としてオスカー・シューベルト (Oskar Schubert, 1849-1933、クラリネットの教授) に習っている。吉本光蔵のベルリン音楽院在学証明書発行控 (ベルリン芸術大学所蔵) によると、他に音楽理論、音楽史、ピアノ、後述する軍楽、指揮などの授業も受けていた³⁶。また、1901年1月19日には学内の演奏会で、リヒャルト・シュトラウスの《13管楽器のためのセレナーデ 作品7》を演奏している³⁷。

(2) ベルリン音楽院の軍楽教育

当時、ヨーロッパの音楽世界では、軍楽が大きな位置を占めており、ベルリンでも、軍楽隊が野外や施設で行う演奏は、市民に広く支持され人気を集めていた。音楽院も軍楽と密接な関係を持ち、19世紀後半から軍楽隊からも入学者をとるようになっていた。彼らは軍楽隊のいわばエリートで「軍楽学生」と呼ばれ、入学基準や教育内容も一般学生とは相違があったようである。軍楽監督ロスベルク (Gustav Roßberg, 1838-1910) が彼らの担当であった³⁸。吉本もこの軍楽学生の一人であり³⁹、ロスベルクからは合奏などを学んだと考えられる。彼らは学内の演奏会にも出るが、軍楽隊と共同で演奏を行うことが多く、吉本の演奏会へのデビューも音楽院軍楽学生総員及軍楽隊の合奏への出演であった⁴⁰。吉本が参加した学内の催しも、軍楽学生対象の送別会などがほとんどである⁴¹。また彼は、ベルリンに駐屯する様々な連隊での軍楽長試験などに陪席している⁴²。軍楽学生の授業の一環であったのかもしれない。

そして、こうした当時のベルリン音楽院での軍楽学生受け入れ制度は、明治41年 (1908) に海軍軍楽隊が始める東京音楽学校への依託生派遣制度と非常によく似ており、そのモデルになったのではないかと考えられる。吉本はこの制度が始まる前年6月に急逝するのだが、軍楽隊へのオーケストラ導入と将来の軍楽隊幹部の養成のために、東京音楽学校で弦楽器や音楽理論・和声などを学ぶ制度設計への路線を敷いたのは、留学中にベルリン音楽院においてドイツの軍楽学生制度を身をもって体験し、帰国後も明治35年7月2日付で「軍楽教育ニ関スル取調ヲ命ス／但教育本部長ノ指揮ヲ受クヘシ」という辞令を受けていた吉本だったの

ではないだろうか。

(3) 音楽会、オペラ・演劇鑑賞

吉本は軍人たちとの交際にも忙しく、音楽会などにはそれほど足を運んでいないが、音楽院入学後半年くらいは比較的熱心であった。鑑賞したのは、オペラハウス (Opernhaus) での王立カペレによる定期シンフォニー・コンサート⁴³、オペラ⁴⁴、日本もの⁴⁵、ご当地もの⁴⁶、スーザ⁴⁷やヨハン・シュトラウス (III世、1866-1939)⁴⁸の吹奏楽・舞踏音楽などである。オペレッタ⁴⁹や動物園などで開催された軍楽隊の演奏⁵⁰にもしばしば足を運んでいるが、これは帰国後の軍楽隊のレパートリーへの関心からと思われる⁵¹。実際に、後年の日比谷奏楽での演奏曲目の中に、たとえば《ゲイシャ》や《ファウスト》《白夫人》からの抜粋曲や序曲など、吉本自身がベルリンやパリで見聞きした曲目が含まれていて⁵²、ヨーロッパでの直接体験の影響を思わせる。

(4) 踏舞会

世紀転換期のヨーロッパは老若男女を問わず、ダンスに熱狂した。日本人留学生もまずダンスを習うのが一般的で、吉本も、「踏舞」教師について熱心に練習し、「踏舞会」の会員になって、ダンスを通じてドイツ人との交際を広げている⁵³。軍楽隊はワルツなどの舞踏音楽を取り上げることも多いので、そのための情報収集の側面もあろうが、遅れてきた青春を謳歌している感もある。

5. 楽器に関連した記事

前項とも関連するが、次に楽器にかかわる記事をまとめてみる。

(1) クラリネットのエーラー社

吉本は、楽器商エーラーでクラリネットを新調している。オスカー・エーラー (Oskar Öhler, 1858-1936) は1887年ベルリンに木管楽器の店をひらき、エーラー・システムと呼ばれるメカニックを発明した⁵⁴。吉本は、157マルクで1900年1月にクラリネットを購入⁵⁵、一年後にCクラリネットを追加購入している⁵⁶。他にラウシュ (Rausch) 社でリードを購入した記録もある⁵⁷。

(2) 1900年パリ万国博覧会の楽器展示・楽器店視察

吉本は、音楽院入学前の1900年7月、折しも開かれていた第5回パリ万国博覧会の見学に出かけている (7月11日ベルリン発、12日パリ着、18日パリ発、19日ベルリン帰着)。この万

博は4月14日～11月12日の会期内に5100万人に近い入場者を集め⁵⁸、ベルリンからも日本人の軍関係者が交替で訪れていた。吉本は短期間ながら精力的に歩き回って、楽器展示、陸海軍戦器船具館などを見た⁵⁹。この機会にパリ観光も行った⁶⁰ほか、パリ滞在最終日の7月17日には、パリ音楽院で生徒の練習を視察し、エラル社での音楽会を聴き、オペラ座でマイヤーベアのオペラ《ユグノー教徒》を鑑賞した。オペラ座の壮麗さには圧倒されたらしく、「此劇場の建築実ニ美ニシテ人ノ目ヲ驚カスニ足ル」と記している。

楽器店視察という点では、帰国途中の1902年4月22・23日にも、ロンドンでベッソン社を二日連続で訪れている。

6. ヨーロッパの日本音楽

留学日記には、日本音楽に関わる一連の記事が二つ登場する。一つは、ベルリンを訪れた烏森芸妓一行に関わるもの、今一つは、当時、ベルリン大学心理学研究所で日本音楽の研究を進めていたカール・シュトゥンプ（Carl Stumpf, 1848-1936）および弟子のエーリッヒ・フォン・ホルンボステル（Erich von Hornbostel, 1877-1935）との接触を示すものである。

(1) 1901年烏森芸妓一行のベルリン公演

世紀転換期の欧米では、多くの日本人芸人が海外公演を行っており、その流れでベルリンにも何組かが訪れた。『東亜』ではたびたび彼らを取り上げて宣伝したり消息を伝えたりしている。たとえば、西浜松井一座は1898年4・5月、翌1899年1・2月にWeingartenで公演している（前者は吉本の渡欧前、後者は一部日記欠落期間で記録がない）し、1899年8月には福島一座が公演した（吉本の来独前後、日記は残存せず）。吉本が二回鑑賞した烏森芸妓については、1901年5月8日フィルハーモニーでの公演と、5月15日から二週間のベル・アリアン座での公演を、『東亜』では芸妓の写真入りで紹介し、現地の新聞評を転載した。彼らはその後ドイツを回って、7・8月にもベルリンを出入りしていた。

もっとも大きな扱いを受けたのは川上一座で、日本にいる頃から動静が注目され、1901年10月号にベルリン公演の予告、12月号で公演中の演目の詳細な紹介（11月に吉本がホルンボステルと鑑賞したもの。写真入り）、1902年1月号では公使館や和独会のクリスマス会に川上一座が登場したことや、12月の演目の内容を紹介し、一座がベルリンで大成功を収めて出立したことを報じている（川上母子の写真入り）。3月号では、「貞奴とドイツ演劇」と題して、両者を比較する評論を掲載、その後の東欧・ロシア公演を報じている。この扱われ方を見ても、当時の川上一座が、他の芸人たちとは一線を画す存在であったことがわかる。

烏森芸妓一行は、1900年パリ万博の世界一周パノラマ館に出演するため渡航し、閉会後ヨーロッパ各地を巡演して、1901年ベルリンを訪れた。留学日記には、5月8日ベルリンのフィ

ルハーモニー・ザールで「ゲイシャ・アーベント」があったことが見える⁶¹。巖谷の『洋行土産』によると⁶²、この催しは、英国の作曲家シドニー・ジョーンズ(Sidney Jones, 1861-1946)が1896年に作曲したオペラ《ゲイシャ》(The Geisha/Die Geisha)の大流行に触発されて「ベルリン児に本物の日本芸妓の芸を見せよう」という趣旨で企画され、それが成功したため、芸妓一行は5月15日からベル・アリヤンス座でさらに数日間公演したという⁶³。このように1900年前後には、美術に数十年遅れてではあるが、ヨーロッパにおいて音楽あるいは舞台芸術版のジャポニズムともいうべき現象が起こり始めていたのである。

留学日記の記事は、この一行の通訳兼マネージャーを務めた社会運動家・奥宮健之(1857-1911)⁶⁴にかかわるもので、奥宮が5月14日吉本の留守中に来訪し、翌日奥宮の代理人に吉本が「日本俗曲譜」を貸与した、というものである。5月18日に、吉本は一行の公演を仲介した玉井喜作からベル・アリヤンス座の切符を贈られ、「日本芸者ノ踊」を見ている。また、9月10日にも「奥宮氏榎村氏来訪日本楽譜貸与ス」という記事がある。

帰国後の芸妓一行の談話記事に、ヨーロッパでは、「踊りも総て活発にして滑稽なるものを撰み始めハ三絃を用るしが後に楽隊と改め」(傍線筆者)とあることを考え合わせると⁶⁵、吉本が貸与した五線譜の「日本俗曲譜」は、伴奏の「楽隊」に供された可能性が高いのではないか。地方を勤める唄方と三味線弾きを連れていた川上音二郎一座と異なり、烏森芸妓一行に音楽の専門家は同行していない。芸妓八人で踊りも音楽も手分けするのは難しく、舞台効果を高めるには、現地で調達できて音量も大きい「楽隊」を地方に使うなどの工夫が必要になり、そのために吉本がもっていた俗曲の五線譜を急遽借り受けたのではないだろうか。このほか、吉本は1901年3月14日、用途は不明だが、パリ在住の画家・和田英作にも「俗曲〈春雨、五十三次、九連環〉」を郵便で送っていた。

そして、吉本は、日本の俗曲の五線譜化に早くから着手していた人物でもあった。瀬戸口は、「故人が半生を捧げて最も努力した事業は邦楽の取り入れであった。明治十九年か二十年頃には既に長唄の越後獅子、雛鶴三番叟、舌出三番叟、汐汲み、楓葉、勧進帳、西王母、其他春雨夕暮、沖の白帆、お江戸日本橋、数へ歌、甚句杯に到る迄完成され、海軍蔵版として立派なものに出版されたが、海軍蔵版である為め世間に知らるゝ処少なく、あれ程の大努力も世人の認むる処とならなかったのは実に気の毒に堪へない」と述べている⁶⁶。これを信ずるならば、吉本の試みは音楽取調掛の長唄・箏曲の五線譜化とほぼ同時で、邦楽調査掛の五線譜採譜より二十年早かったことになる。吉本がドイツに持参したのはこの「海軍蔵版」の楽譜だった可能性があるのではないか。ただし、これに該当する海軍蔵版の印刷楽譜はこれまで見つかっていない。

(2) シュトゥンプ、ホルンボステルとの接点

1901年には、ベルリン大学のシュトゥンプと弟子のホルンボステルが吉本に接触していた。

1月27日シュトゥンプが初めて来訪した際不在で、29日に葉書を受け取った吉本は、2月1日こちらからシュトゥンプを訪ねた。用件について留学日記には全く言及がないが、当時シュトゥンプらが始めようとしていた日本音楽の調査に関する何らかの打診だったのではないかと推測される。一方、弟子のホルンボステルは11月21日に吉本を訪問し、翌22日ツェントラー劇場での川上一座の公演に同行、終演後には川上音二郎と貞奴に面会した。1903年に出されたホルンボステルとアブラハムの論文「日本人の音組織と音楽に関する考察」には、「日本の音楽家だがヨーロッパ音楽の嗜みもあるK.ヨシモトは三味線伴奏による歌を多数五線譜にしている。」と言及されている⁶⁷。当時の彼らの日本音楽に関する調査に、吉本のもつ俗曲譜が参照された可能性が高いと思われる。

おわりに

吉本光蔵の留学日記は、1900年前後の日欧間での音楽交流の具体相を伝える貴重な一次資料である。今日考えられている以上に、当時すでに日本とヨーロッパとの間には、音楽に関わるモノや情報を介したさまざまな交流が、かなりの密度で行われていた。ヨーロッパから日本への影響は、たとえばベルリン音楽院の軍楽学生制度が、明治41年に開始される海軍軍楽隊から東京音楽学校への依託生派遣制度のモデルになったと考えられること、吉本がベルリンで実際に見聞きしたオペラ《ゲイシャ》や《ファウスト》の抜粋曲等が日比谷奏楽で演奏されたこと、などからも窺うことができた。逆に、日本からヨーロッパへは、川上音二郎一座や烏森芸妓一行らの公演により、その頃音楽版ジャポニズムともいうべき日本の俗曲の流布が見られたこと、それらに呼応するようにシュトゥンプやホルンボステルらが着手していた初期の比較音楽学の研究に、ベルリンに滞在中の川上一座や吉本らが日本音楽に関する情報を提供していたことなど、当時の状況の一端が見えてきた。

今後、さらに吉本の帰国後の日記も読み解き、ベルリンでの経験がどのように日本での音楽活動に生かされていったかについても、検証をつづけていきたい。

注：

1. 本稿は、2010年11月14日、東京学芸大学で開催された(社)東洋音楽学会第61回大会での研究発表をもとに、2011年1月の平高によるベルリンでの資料調査、および同年8月の塚原・平高によるベルリンでの資料調査の成果を盛り込んで、加筆修正したものである。

なお、吉本の留学日記については、塚原が担当する平成22年度の東京芸術大学大学院「音楽学演習」の前期で取り上げ、1900年1月1日から8月15日分までを講読・翻刻した。演習履修者は、柴田真希（音楽学博士3年）、安納真理子（音楽学博士2年）、丸山彩（音楽教育博士1年）、角

- 優希（音楽学修士2年）、金寶羅（同）、佐藤岳晶（芸術環境創造修士2年）、橋本かおる（音楽学修士1年）、服部阿裕未（同）、コリー・シュムコー（研究生）、時田マクイーン深山（同）、平高典子（私学研修員、所属はいずれも当時）である。その後、1900年12月31日分までを塚原・平高・柴田・丸山の4名で講読・翻刻し、さらに残りを塚原・平高で読み合わせした。留学日記の当該期間分については、これらの成果に基づくものであることをお断りしておく。
2. たとえば、日比谷奏楽の欧文プログラムはMitsuzo Yoshimoto、肖像画に添えられた綴りはM. Yoshimotoであり、吉本光蔵のベルリン音楽院在学証明書発行控（ベルリン芸術大学所蔵）と1902年の『ドイツ軍楽年鑑』の記載はともにKozo Yoshimoto。ただし、後述する『東亜』では、当初のMitsuzoを後にK.と改めており、本人が当時から二通りを使っていた可能性がある。
 3. ただし、日記に関して、吉本の次男で新聞記者であった明光は、「僕の手許に日記帳が六冊ある」と述べ（吉本明光「父の或る断片」『月刊楽譜』1931年6月号、42頁）、①明治18年7月26日～明治22年5月の日記（このうち明治18年7月26日～8月12日分を「中国筋御巡幸日誌（遺稿）」と題し、翻刻を35～41頁に掲載）、②明治32年～35年のベルリン留学時代の日記、③明治37年～40年の日記四冊、を挙げている。冊数からすると、留学時代の日記は一冊の筈だが、少なくとも留学日記中には明治32年（1899）分は含まれず、明治40年（1907）の日記も玉川氏の許にはない。
 4. 総合芸術アーカイブセンター大学史料室・橋本久美子氏のご教示による。
 5. 玉川氏によれば、光蔵以前の吉本家に関する手がかりはないとのことである。携帯履歴には、母・ヨシ、弟・勘治、妹・シウの名前が見える。また、吉本は明治26年（1893）に結婚したキン（野田氏、神奈川県士族・石橋健作養女）との間に、長女・幸江、長男・周之助、次男・明光、三男・益三、四男・晴男の四男一女を儲けた。
 6. 海軍省『公文類纂』明治11年前篇第11巻224「軍楽通学生申付候御届」（防衛省防衛研究所所蔵）。採用時のこの文書では「島根県士族」だが、後に貫属替えをしたのか、携帯履歴の族籍は「東京府士族」となっている。
 7. 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版、1993年、199-201頁。
 8. 瀬戸口藤吉「先輩吉本光蔵君の思出で」『月刊楽譜』1931年6月号、40-41頁。瀬戸口は明治15年（1882）の第2回軍楽通学生23名の一人。
 9. 辞令による。その後、明治34年（1901）4月1日には「独国留学ヲ免シ独国駐在ヲ命ス／手当金年額二千三百円ヲ給ス」との辞令を受けている。吉本明光は、「聞くところによると、出発に際しては六年計画でホッホシューレに入学したのだが、その後、日露の国交が険悪へと傾いて来たので、所謂国事多端に際したので予定より早く一九〇二年、即ち明治三十五年に帰朝命令が降った、と云ふ。」（「父を語る」『月刊楽譜』1930年6月号）と述べるが、裏付けとなる資料はない。
 10. 辞令とともに玉川氏所蔵。
 11. 吉本明光「父とクラリネット」『フィルハーモニー』1929年12月号、同「父を語る」前掲、同「父の或る断片」前掲、瀬戸口藤吉「先輩吉本光蔵君の思出で」前掲、等。
 12. 巖谷小波『洋行土産』上巻、博文館、1903年、150頁。
 13. 明治16年音楽取調掛入学、20年卒業後、20～24年欧米留学。帰国後、29～32年母校で講師嘱託としてチェロを教えた（『東京音楽学校一覧』（東京芸術大学附属図書館所蔵）、東京芸術大学百年

史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第2巻』音楽之友社、2003年の巻末資料「東京音楽学校職員一覧および在職年表」、飯島国男『比留間賢八の生涯—明治西洋音楽揺籃時代の隠れたる先駆者』全音楽譜出版社、1989年）。飯島によれば、吉本は鹿鳴館でダンスのピアノ伴奏をしており、比留間もピアノ伴奏の手伝いをしていた。したがって、この鹿鳴館時代に両者に接点が生まれた可能性がある。

14. 吉本は彼の不在中荷物を預かるほど親しく、頻繁に訪問しあったり、手紙を交換したりしている。吉本より早く、1901年初頭までに帰国したようである（飯島、前掲書、71-2頁）。後述の『東亜』の日本人住所録では明治33年4月号から10月号までシュテチーンおよびベルリン在住が確認できる。
15. 後の安藤幸。明治29年東京高等師範学校付属音楽学校卒業、研究科に進み、32年文部省音楽留学生としてヴィーンとベルリンに留学。36年帰国後、東京音楽学校教授に就任しヴァイオリンを教えた（『東京音楽学校一覧』、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第2巻』）。幸の姉・延（1870-1946）と比留間は、音楽取調掛で学年は一年違い、明治20年ごろ延がヴァイオリン、比留間がチェロで、弦楽四重奏を演奏しており（飯島、前掲書、口絵写真）、両者ともに同時期（明治22年頃）に欧米に留学もしていて、かなり親しい関係にあったと思われる。また比留間は今回（2回目）の渡欧前東京音楽学校でチェロを教えており、幸ともすでに面識があったと考えられる。一方、吉本も、明治29年の延の帰朝披露演奏会でもあった第1回同声会演奏会で、ゲストとして延の伴奏でクラリネットを演奏していることから、幸とも面識があったかもしれない。
16. ヴァイオリンをマルケース（Karl Markees）および校長のヨアヒム（Joseph Joachim）に学んだ（„Jahresbericht über die mit der Königlichen Akademie der Künste zu Berlin verbundene Hochschule für Musik“（以下『ベルリン音楽院年報』）、1899-1903年、ベルリン芸術大学所蔵）。
17. 留学日記によると、9月9日吉本は比留間とともに幸を訪問、同月23・24日幸と合奏している。幸がピアノで伴奏して試験に備えたのであろう。吉本が翌10月1日の入学試験に合格すると、二人は近しく往来し、一緒にオペレッタ（留学日記1900年12月27日《ゲイシャ》鑑賞）に出かけた。幸は吉本より後、1903年春学期でベルリン音楽院を卒業している（『ベルリン音楽院年報』、1902-1903年。『東亜』の日本人住所録では1899年12月号から1902年12月号まで名前が確認できる。）
18. 東京高等師範学校付属音楽学校を明治31年（1898）卒業後研究科へ進み、34年（1901）留学。4月横浜出帆、5月18日ベルリン着、6月7日ライプツィヒへ出発した。ライプツィヒ音楽院で作曲を学ぶが、病を得て1902年10月日本帰着（松本正『瀧廉太郎』大分県先哲叢書、大分県教育委員会、1995年）。瀧と吉本が日本で知り合っていた可能性は高いし、一方幸田幸は瀧とは日本では非常に親しかった（安藤幸「瀧さん」『音楽之友』第5巻第8号、1947年、31-33頁）。
19. Königliches Opernhausで演目はグノーの《ファウスト》、切符は幸田幸から贈られた（留学日記1901年5月30日）。
20. 留学日記1901年6月7日。
21. 大分県教育庁文化課編『瀧廉太郎資料集』、大分県先哲叢書、大分県教育委員会、1994年、132頁。ただし『東亜』6月号では別住所になっていて、このあたりの事情はつまびらかでない。留学日

記には、瀧が吉本の下宿に引っ越してきたことを示す明確な記述はない。

22. 留学日記1901年12月2日。
23. 中村理平『洋楽導入者の軌跡—近代日本洋楽史序説』刀水書房、1993年、310頁。エッケルトは、明治12～22年(1879-89)海軍軍楽隊雇教師、明治20～32年(1887-99)宮内省式部職楽部雇教師、明治30～32年(1897-99)は宮内省楽部と海軍軍楽隊の雇教師を兼務。以上の正規雇用のほかに、音楽取調掛、陸軍軍楽隊、海軍軍楽隊の嘱託教師も務めた。長く日本で奉職したエッケルトが、明治32年3月に満期解雇・帰国となった背景には、宮内省式部職の西洋音楽員への海軍軍楽隊退役者任用をめぐり、雅楽と西洋音楽を兼修する式部職楽部の楽師たちとの間に発生した確執があった(塚原康子『明治国家と雅楽』有志舎、2009年、213-4頁)。
24. 聖マティアス墓地(St.Matthias-Friedhof)所蔵の埋葬記録によれば、住所はデネヴィッツ通り(Dennewitzstr.)13、1901年4月23日埋葬時55歳。職業は音楽家。
25. エッケルト一家の帰国時の住所はヴェンツェルと同じ。エッケルトは帰国後、ベルリンの陸軍軍楽隊の楽長の職についていた(連隊名等は不明)。中村、前掲書、311-2頁。
26. 1879年生、明治27年3月19日、弟のカール(1884年生)と先に帰国。中村、前掲書、348、356-7頁。
27. 留学日記1900年9月22日「フランツニ明廿三日誕生日ニ付信書及金五麻書止メ郵便ニテ送ル」。
28. 彼の経歴および『東亜』については、以下を参照。泉健『『Ost=Asien』研究1-4』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』52-54集、2002-2004年、泉健「文献に見る玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』56集、2006年、大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯』新潮社、1998年。
29. 40年にわたりヨーロッパと日本を行き来しながら明治政府に勤めた。当時ベルリンで在外勤務をしており、『東亜』に多くの寄稿を行っていた。
30. 巖谷大四『波の聲音—巖谷小波伝』新潮社(新潮選書)、1974年、巖谷小波『洋行土産』(上・下巻)博文館、1903年参照。
31. たとえば1901年11月公使館での天長節の宴会で、小波では「吉本軍楽長の吹奏で、一同君が代を合唱し」(巖谷前掲書、上巻、260頁)とあるが、吉本自身は自分の吹奏については記録していない。ただし、両人は早いころに面識を得たようだが(吉本は彼に1901年の年賀状を送っている)、直接の行き来はほとんどなかったと思われる。
32. Hermann Plaut (森岡健二／志村哲也復刻・訳)、*Japanisches Lesebuch*、大空社、2006年。
33. 留学日記1900年12月31日、1901年11月3日。
34. 留学日記1900年1月18日。
35. 吉本がベルリン到着後すぐにピアノを借りていることが、1899年8月26日付のピアノ借用領収書から判明する。出納簿によるとレッスン代は一回4マルク。クラリネットは、留学日記によると、モアビート(Moabit)在住のベルクナー(Bergner)におおむね週一回習っていた。出納簿によれば謝礼は月25マルク。
36. 留学日記の記述を総合すると、ピアノは補助教員のデットマン(Max Dettmann, 1863-1905)のレッスンを受けた。その他、オーボエの教授エバーハルト(Georg Eberhart)、オルガンの補

- 助教員ベッカー (Otto Becker, 1870-1954) の授業も受けており、前者はクラリネットあるいは合奏を、後者はピアノを担当したと推測される。
37. 『ベルリン音楽院年報』、1900-1901年、ベルリン芸術大学所蔵、7頁。留学日記には「柏林ニ於ケル公^(ママ)会演奏ノ第二回目トナス」とのみあって、曲名は書かれていない。
 38. Dietmar Schenk, „Die Hochschule für Musik zu Berlin: Preussens Konservatorium zwischen romantischem Klassizismus und Neuer Musik, 1869-1932/33“, Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, 2004, pp.172-178.
 39. 1879年に創刊された『ドイツ軍楽年鑑』(*Militärmusiker Almanach für das Deutsche Reich*) には、ドイツ陸軍(のちに海兵隊も追加)が有する軍楽隊の全隊員名が収録されている。その1902年版中の、ベルリン音楽院在籍者リストの中に、K. Yoshimoto, Kapellmeister der Kais. Japan. Marine in Tokio (Japan) と、吉本の名が掲載されている (p.390)。軍楽学生を受け入れていたのは三つの音楽院で、1902年当時、ベルリン音楽院に39名、ドレスデン音楽院に3名、ミュンヘン音楽院に3名が在籍していた。なお、1902年当時のドイツ陸軍の全軍楽隊数は、大小あわせて436隊にも及んでいた。
 40. 留学日記1900年12月21日。ドイツ皇太子臨席のもと、サーカス・ブシュ (Zircus Busch) でロスベルクの指揮で演奏した。
 41. 1900年12月20日軍楽学生クリスマス会、1901年3月8日軍楽学生卒業送別会など。
 42. 1900年11月8日「Kaiser Franz Garde Grenadier Regiment兵営」、1901年1月10日「南東区 Wrangel Str. III. Garde Regiment 兵営」、1902年1月16日「皇帝フランツ連隊兵営」での軍楽長試験など。
 43. 留学日記によれば、1900-1901年のシーズンの第2・3・4・8・9・10回を聞いている。ベルリン州立公文書館 (Berlin Landesarchiv) 所蔵プログラムによると、指揮はいずれもヴァインガルトナー (Felix Weingartner)。
 44. 留学日記1901年3月2日ヴェルディ作曲の《イル・トロヴァトゥーレ》。
 45. 留学日記1900年6月30日サリヴァン作曲の《ミカド》、8月14日と12月27日ジョーンズ作曲の《ゲイシャ》(12月は幸田幸と行った)。
 46. 1900年8月9日《11時過ぎのベルリン (Berlin nach Elf)》、1901年4月27日リンケ (Paul Lincke) の《ルナ夫人 (Frau Luna)》。
 47. 留学日記1900年5月25日。スーザはパリ万博に出演するため渡欧しており、クロル劇場の庭でアメリカの軍楽隊を指揮した (ベルリン州立公文書館所蔵プログラム)。
 48. 留学日記1900年6月3日。クロル劇場の庭でウィーンの自らの楽団を指揮し、当地の軍楽隊が加わった (ベルリン州立公文書館所蔵プログラム)。
 49. 留学日記1900年10月6日のボイエルドュー (François-Adrien Boïeldieu) 作曲《白夫人 (La dame blanche, 「白衣の婦人」) や、前述の日本もの、ご当地もの。
 50. 動物園では、さまざまな軍楽隊が有料コンサートを行った(1900年6月6日、9月9日、1901年5月27日)。動物園外でも1901年5月14日プルツィヴァルスキー (Przywarski) 指揮の軍楽隊演奏を聞いている。

51. 吉本は演奏に対してはほとんどコメントしていないが、1900年4月2日フィルハーモニーホールで開いたベルリン交響楽団の伴奏による「ベルリン男性合唱団」の演奏会（Vossische Zeitungの当日の広告による）は「十二曲ノ演唱アリ実ニ驚クベキ名手ノミナリキ」と感嘆している。
52. 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラムー日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』つくばね舎、2010年。とくに《ゲイシャ》抜粋曲と《ファウスト》抜粋曲は2度演奏されている。
53. 「踏舞会」夜会の他にも、「踏舞会」仲間と頻繁にベルリン郊外などへ遠足にも出かけた。
54. 当時の広告（吉本の1902年版軍楽手帳など）では、木管楽器の専門店として、ベルリン音楽院、オペラ、フィルハーモニーなどとの取引を謳っている。
55. 留学日記1900年1月7日。ただし、当日の出納簿には支払いの記録なし。
56. 留学日記1901年1月5日。当日の出納簿に支払いの記録なし。前年12月31日に100マルク払っているのが、このクラリネットの代金かもしれない。
57. 留学日記1901年6月13・19日。
58. 井上さつき『音楽を展示するーパリ万博1855-1900』法政大学出版局、2009年。
59. 他にシャン・ド・マルスの工芸・機械農産館、電気宮、日本茶屋、衣装館、夜のイルミネーション、プチ・パレ、グラン・パレなどを見学した。
60. 7月16日に、アンヴァリッド軍事博物館、ブーローニュの森、ロンシャン競馬場での観兵式、ルーブル宮、シャンゼリゼ、サン・ジェルマン大通り、コンコルド広場、リュクスンブール公園などを見物した。途中、セーヌ川下りもしている。
61. 1901年の烏森芸妓一行のヨーロッパ公演については、倉田喜弘『海外公演事始』（東京書籍、1994年）が最も詳しい先行研究である。ただし、同書が、ゲイシャ・アーベント開催日を日本の新聞記事から4月8日開催としている点については、留学日記と『洋行土産』の記述が一致する5月8日であったと考えて矛盾はないと考える。
62. 巖谷小波『洋行土産』前掲、下巻、78-85頁。
63. 当時の新聞Berliner Börsen-CourierやVossische Zeitungの記事によると、おそらく25日まで興行されたと推定される。同時期に、ツェントラル劇場（Central Theater）ではジョーンズの《ゲイシャ》がロングランで上演されていた。
64. 奥宮健之は自由民権運動に関わって収監され、1896年釈放された。烏森芸妓一行への同行はこの時期にあたる。のちに大逆事件で死刑判決を受け、1911年1月24日刑死した（絲屋寿雄『自由民権の先駆者ー奥宮健之の数奇な生涯』大月書店、1981年）。
65. 「洋行帰りの扇芳亭連の気焰」『読売新聞』明治35年1月17日。
66. 瀬戸口藤吉「先輩吉本光蔵君の思出で」前掲、41頁。
67. 寺内直子「1900年前後ヨーロッパにおける日本音楽研究ーホルンボステルとアブラハムの論文を中心に」『日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究ー1900年パリ万博前後における東西の視線の相互変容』平成13～15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)、研究代表者：井上さつき）研究成果報告書、2004年。引用は寺内訳による。

*付記：本稿は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究成果の一部である。

吉本光蔵略年譜

文久3(1863)年	10月6日	江戸に生まれる
明治11(1878)年	6月20日	海軍軍楽隊の第1回軍楽通学生に採用
	12月28日	楽生として正式入隊
明治12(1879)年	3月30日	フランツ・エッケルト着任
明治27(1894)年	7月13日	任海軍軍楽師
明治28(1895)年		第4回内国勸業博覧会審査員
明治30(1897)年～31年		『海軍軍楽学理的教科書』編纂委員
明治32(1899)年	3月31日	エッケルト、任期満了
	4月19日	エッケルト、横浜からベルリンへ帰国、Wenzel Eckert宅へ
	5月13日	ドイツ留学の命を受ける。8月20日ベルリン着
明治33(1900)年	10月1日	ベルリン音楽院入学
明治35(1902)年	3月18日	帰国命令、20日音楽院を退学。
	4月18日	ベルリン発、6月13日横浜帰着
	10月6日	任海軍軍楽長、横須賀海兵団付
明治36(1903)年	10月15日	中村祐庸退役により海軍軍楽隊のトップに就任
	12月28日	第二艦隊旗艦乗組、日露戦争に従軍（～明治38年3月15日）
明治38(1905)年	8月	日比谷奏楽開始、初回8月12日以降海軍軍楽隊を指揮
明治40(1907)年	6月11日	逝去、享年45歳

留学日記主要記事一覧（イタリックは留学日記以外の資料に基づく事項）

明治32(1899)年	8月20日	ベルリン着、当初 <i>Wenzel Eckert</i> と同住所
	12月(?)	幸田幸、ウィーンを経てベルリン着 (1903年帰国)
明治33(1900)年	1月1日	この日からの日記残存 (1902年6月16日まで)
	1月7日	エーラーでクラリネット購入
	1月28日	この日から日記欠く (3月31日まで)
	3～10月(?)	比留間賢八、シュテティーン及ベルリン在住、1901年初頭帰国
	4月1日	幸田、ベルリン音楽院入学 (1903年3月31日まで在籍)
	4月14日	パリ万国博覧会 (～11月12日)
	4月23・24日	軍艦・八雲回航員を遊就館 (武器庫)・動物園・水族館に案内
	6月14日	閑院宮載仁親王をアンハルター駅に迎える
	6月16日	シュテティーンの八雲に泊
	6月18日	閑院宮に面会
	7月11日	パリ万国博覧会見学に出発 (19日帰着)
	8月14日	オペレッタ《Die Geisha》を鑑賞
	9月9日	比留間と共に幸田幸を訪問
	9月23・24日	幸田幸を訪問し合奏
	10月1日	ベルリン音楽院入学
	11月5日	巖谷小波、ベルリン着、東洋語学校教師に (1902年9月3日ベルリン発)
	12月12日	エッケルト、フリードリヒ街停車場から朝鮮へ出発、見送る
	12月21日	音楽院軍楽学生総員及軍楽隊の合奏への出演
	12月31日	日本公使館の忘年会、幸田幸のピアノで《君が代》を歌う
明治34(1901)	1月19日	音楽院音楽会に出演、Richard Strauss演奏
	1月27日	不在中にシュトゥンプ来訪
	2月1日	シュトゥンプを訪問
	3月14日	パリ在住の画家・和田英作に「俗曲」を郵送
	4月22日	20日 Wenzel Eckert 死去との知らせ、23日会葬
	5月8日	烏森芸妓のゲイシャ・アーベントに行く

	5月14日	不在中に奥宮健之来訪
	5月15日	奥宮の代理人に「日本俗曲譜」を貸与
	5月15日～	烏森芸妓、ベル・アリヤンス座で興行開始
	5月18日	瀧廉太郎、ベルリン着。(病を得て1902年8月24日ヨーロッパ発。翌年6月25日逝去)
	5月19日	瀧をホテルに訪問
	5月18日	ベル・アリヤンス座で烏森芸者の踊りを見る
	5月19日	瀧をホテルに訪問。以後ベルリンの住所は吉本と同じ
	6月7日	瀧のライブツィヒ出立をアンハルター駅に見送る
	6月13・19日	Rauschでクラリネットのリード求める
	9月10日	「奥宮氏榎村氏来訪日本楽譜貸与ス」
	11月3日	天長節に公使館に招かれ、《君が代》の伴奏
	11月21日	ホルンボステル来訪
	11月22日	ツェントラール劇場での川上一座の公演にホルンボステルと同行、終演後川上と貞奴に面会
	12月2日	瀧発病の知らせを幸田より受け取る
明治35(1902)年	3月18日	帰国命令を受ける
	3月20日	音楽院を退学する
	4月18日	ベルリン発
	4月22・23日	ロンドンでベッソン社訪問
	6月11日	神戸着、13日横浜帰着

Das Berlin-Tagebuch von Kozo Yoshimoto, Kapellmeister im Marine-Corps

TSUKAHARA Yasuko, HIRATAKA Noriko

Das Tagebuch von Kozo (Mitsuzo) Yoshimoto, der sich als erster Stipendiat des Marine-Corps von 1899 bis 1902 in Berlin aufhielt, befindet sich als Mikrofilm in der Tokyo Universität der Künste (Tokyo Geijutsu Daigaku). Das Original ist im Besitz von Frau Kayoko Tamagawa. Yoshimoto (1863 - 1907) führte dieses Tagebuch vom 1. Januar 1900 bis zum Tag seiner Rückkehr nach Yokohama am 13. Juni 1902. In diesem Aufsatz soll anhand dieses Tagebuchs, das hier zum erstenmal vorgestellt wird, der damalige Austausch zwischen Japan und Europa auf dem Gebiet der Musik aufgezeigt werden.

Yoshimoto wurde am 20. Juni 1878 noch als Musikstudent im ersten Studienjahr in das Marine-Corps aufgenommen und trat am 28. Dezember offiziell als Musikstudent in das Musikcorps ein. Am 13. Mai 1899 erhielt er den Befehl, nach Deutschland zu gehen, um dort Musik in Theorie und Praxis zu studieren und um die Organisation der Militärmusik zu erlernen. Damals erhielt er ein Stipendium von 2.000 Yen. Nach einer etwa einjährigen Vorbereitungszeit bestand er am 1.10.1900 die Aufnahmeprüfung der Hochschule für Musik in Berlin, wo er bis zum März 1902 studierte. Als Hauptfach studierte er Klarinette bei Oskar Schubert. Andere Fächer waren u.a. Musiktheorie und Musikgeschichte. Außerdem nahm Yoshimoto Klavierunterricht. Bei dem Militärmusikinspizienten Gustav Rossberg studierte er zusätzlich Militärmusik und Dirigieren.

Nach seiner Rückkehr nach Japan nahm er auf dem Flaggschiff „Izumo“ der Zweiten Kriegsflotte am Russisch-Japanischen Krieg teil. Von August 1905 bis kurz vor seinem Tod im Jahr 1907 leitete er sämtliche Konzerte des Marine-Corps im Hibiya-Park.

Yoshimotos Tagebuch ist insofern ein wertvolles historisches Dokument, als sich dort sein Alltag im Berlin der Jahrhundertwende widerspiegelt, wie das Üben von Klarinette und Klavier, Sprachunterricht in den Monaten der Vorbereitung auf die Aufnahmeprüfung; Kauf und Reparatur seiner Klarinette bei der Firma Öhler; Teilnahme an Bällen; Empfang für die Kameraden, die das in Deutschland bestellte Kriegsschiff „Yakumo“ nach Japan überführten; die Besichtigung der Pariser Weltausstellung im Juli 1900; Opern- und Theater-aufführungen, sowie Konzerte in Berlin und Paris.

Damals lebten etwa einhundert Japaner in Berlin. Yoshimoto hatte u.a. Kontakt zu

Kameraden in der Marine, zu Musikern wie Kenpachi Hiruma, Ko Koda und Rentaro Taki und zu Beamten im Konsulat. Außerdem unterhielt er eine freundliche Beziehung zu Franz Eckert und seiner Familie, der für das Kaiserliche Hofministerium als Kapellmeister der Marine gearbeitet hatte, und im März 1899 nach Deutschland zurückgekehrt war.

Für das Jahr 1901 werden Kontakte zu Carl Stumpf und Erich Moritz von Hornbostel an der Berliner Universität erwähnt. Die begannen damals Informationen über die japanische Musik zu sammeln. Im Mai und September 1901 finden wir Eintragungen über die Noten der Japanischen Volksmusik („Nihon Zokkyoku-fu“), die damals in Besitz von Yoshimoto waren, und die er Kenshi Okunomiya, dem Sekretär der Karasumori-Geisha-Truppe, geliehen hatte. Ebenso Aufzeichnungen über die Geisha-Truppe und die Aufführungen von Kawakami und dessen Truppe in Berlin. Man sieht daraus die Verbreitung der japanischen Volksmusik um 1900 in Europa, was man als den europäischen „Japonismus“ in der Musik bezeichnen kann.

Auf der anderen Seite zeigen die Berichte von den Stücken, die Yoshimoto nach seiner Rückkehr im Hibiya-Park aufführte, dass er das, was er in Berlin hautnah erlebt hatte, hier als direktes Ergebnis seines Studiums wiedergab.

1908 begann das Marine-Corps seine Anwärter auf das Musik-Corps zum Studium an die Musikhochschule Tokyo zu schicken, wo sie eine Ausbildung erhielten, die der in Berlin sehr ähnlich war. Daraus lässt sich der Einfluss Yoshimotos auf die japanische Musikerziehung erkennen.

Yoshimotos Tagebuch ist ein sehr aufschlussreiches historisches Dokument, das den Austausch zwischen Europa und Japan um das Jahr 1900 sehr deutlich macht.